

# 東京未来ビジョン懇談会（第3回）

---

平成29年5月23日（火）

## —議事概要—

## 東京未来ビジョン懇談会（第3回）

平成29年 5月23日

**【潮田次長】** それでは、定刻になりましたので、第3回「東京未来ビジョン懇談会」を開会いたします。本日の進行役を務めます政策企画局次長の潮田でございます。よろしくお願いいたします。

初めに、会議の公開についてご説明いたします。

本日の会議の様子は、東京都のホームページ上でインターネット中継により配信されております。

報道機関の皆様は、懇談会の冒頭から終了まで取材が可能です。

また、本日の会議資料、議事概要、中継映像につきましては、ホームページ上で公開いたします。

なお、本日から新メンバーの漫画家、山科ティナ様が参加されますが、所用のため、遅れて来られます。到着後に改めてご紹介をいたします。

それでは、開会に当たりまして、小池知事よりご挨拶をいただきます。知事、よろしくお願いいたします。

**【小池知事】** 皆さん、こんにちは。「ビジョ懇」、どんなに美しい女性ばかりと言ったら、そのとおりでございます。美男もそろって、これからの東京の未来のビジョンを皆さんで大いに語っていただくという会、もう3回目となりました。皆さんもそれぞれ、お互いもうネットワークができて、この間、田口さんのNO LIMITSの方に、私、射撃をさせていただいたんですけども、みんな、もうつながって、皆さん、来てくださって、本当にここだけでも既につながりができて、広がりになっているということ、大変うれしく思っております。

今回から山科ティナさん、漫画家でいらっしゃいます。現役の大学生。所用のためと言って、今、ご説明ありましたが、大学の授業がまだあるというので、これから駆けつけるという話でございます。今日も、思い切り皆さんの夢を語っていただきたい。特に、うーんと向こうの方まで、つまり、明日、あさってじゃなくて、2050年とかそれぐらいのスパンで、是非皆さん、大いに、「うそ!？」と思いながら話し合っていたいただきたいと思っております。

このビジョ懇の初回で、20世紀の豫言という、116年前の未来像、報知新聞が掲載したということで、落合さんなんかもすごくあれで啓発されたところがあるんじゃないかなと思いましたけれども、夢のような世界が、今、全然夢じゃなくて現実になっているということとはたくさんありますよね。ということで、皆さんにはそういった、「うそ!？」と思えるような話をお願いしたいと。いや、こうなればいいなという話をお願いしたいと思っています。

今日は、また別のものをご紹介したいと思うんですが、実は来年の平成30年、江戸から東京、東京府に変わりましたちょうど150年になります。今、正面に写し出されているのが江戸の古い地図であります。江戸から東京へ変わって150年、それを記念しまして、様々なイベントも今考えているわけでございますけれども、これが150年前の万延2年というんですけれども、江戸の地図、そして、「濱御殿」と書いてある所が今の浜離宮という所になります。

それから、森のある所が増上寺、その少し上の緑地が愛宕山になります。この愛宕山から、その時代、150年前、150年前でいいんですかね、見た写真があるんですね。これが150年前の江戸の、江戸というか、東京に変わった頃の姿であります。一面に大名屋敷の屋根とか塀がずーっと広がっていて、それこそどこかで火災が起こったら、すぐに延焼して大変なことになりそう。江戸の華としての火消しの話、伝統もありますけれども、逆に、それだけ火事も多かったということだろうと。この写真を見るだけでも、本当に燃え広がったら大変だろうなと想像が付くかと思います。

そして、今、こちらでございます。ほぼ同じエリアの東京の写真、航空写真でございますけれども、150年間で東京もこれだけ変わったということであります。2030年、40年、50年と、それから、そのまた先の東京で、皆さんがバリバリ活躍しておられる、そういう時代のことを考えながら、是非ぶっ飛んだアイデアをどんどん出していきたいと思っています。

さて、今回、3回目ですけれども、都市の魅力ということの一つの切り口にさせていただきます。プレゼンターは、たかみなさん。

**【高橋みなみ様】** はい、お願いします。

**【小池知事】** 歌手でタレントの高橋みなみさん。そして、今日はフェンシング、オリンピックの太田雄貴さん。今日、お友達とご一緒だと伺っているんですけれども。

**【太田雄貴様】** 194センチ。

【小池知事】 194センチ！ でも、この間、バレーボールの大竹さんに会って、208センチだったので。すごい、すごい、でも。フェンシングの同じ選手ですね。

そして、3番目のプレゼンターが現役の渋谷区長、長谷部健さんということで、渋谷の例のスクランブル、交差点については、今回、私は落款にしました。判子。それと、「Tokyo Tokyo」のロゴにいたしまして、これからますます、別に渋谷をえこひいきするつもりではなかったんですけども、(ニューヨークの)タイムズスクエアみたいなもので、とにかく行ってみたいと、外国からの方は大体そう思うでしょ、パッケンね。

【パッケン (パトリック・ハーラン) 様】 行きたいです。

【小池知事】 行きたい。ということで、スクランブル交差点の落款もはやらせちゃおうかななんて思っております。いずれにしましても、楽しみにいたしておりますので、今日はお三方のプレゼンターの皆さん、どうぞよろしく願いいたします。

それじゃ、3回目のビジョ懇、皆さんで和気あいあいと、そして楽しく夢を語っていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

【潮田次長】 知事、ありがとうございます。今、お話がございましたように、本日の懇談会では、まず、高橋様、太田様、長谷部様にプレゼンテーションをいただきます。その後、東京の未来や東京の可能性などについて、メンバーの皆様全員での意見交換を行いまして、おおむね18時頃の終了を予定しております。

それでは、ここから進行は知事にお願いをいたします。

【小池知事】 それでは、早速始めましょうか。最初のプレゼンターは高橋みなみさん。よろしくお願ひいたします。

【高橋みなみ様】 はい、お願ひします。

【小池知事】 どんなアイデアが出てくるか、楽しみ。

【高橋みなみ様】 頑張ります。

ここに立つと緊張しますね。皆さん、改めまして、こんにちは。高橋みなみです。まずは、私のことをご存じない方もいらっしゃると思いますので、簡単に自己紹介をさせていただきます。

昨年までAKB48というアイドルグループに所属しておりました。グループには総勢300名以上の女の子が在籍しておまして、彼女たちをまとめる総監督というものをしておりました。ちなみにこちらが当時の集合写真なんですが、多いですね。どちらに私はいるか、皆さん分かりますか。こちらです。はい、いました。そんなグループを2016年に卒業しま

して、現在はソロの歌手として、また、NHKで小学生、中学生を対象にした教育番組「はじめをノックアウト」や、TOKYO FMで、「高橋みなみの『これから何する？』」など、タレントとしても活動しております。そんな私が、今回プレゼンさせていただくのはこちらです。「Tokyo Entertainment City構想」。その名のとおり、東京をよりエンターテインメントの都市として世界にアピールしたいという内容でございます。具体的に言いますと、劇場、ホールの集積地をつくることを目的としております。

それでは、まずは、世界の劇場、ホール集積地とはどんな所があるのか見てみましょう。こちらです。皆さんもご存じだと思いますが、ブロードウェイ、ウエストエンド、ラスベガス、いずれも世界的な知名度を誇り、誰でも一度は行ってみたいと思えるエンターテインメントシティです。ブロードウェイは、タイムズスクエアを中心に約40もの劇場がありまして、年間客数、約1,300万人、経済効果は約120億ドル、日本円で約1兆3億6,000万円と言われております。

そして、ロンドンのウエストエンド、演劇、ミュージカル、バレエ、オペラといった多様な舞台芸術の中心地、年間客数は約1,500万人、経済効果は約15億ポンド、約2,200億円だそうです。

そして、ラスベガス。カジノのイメージが強いと思うんですけども、スポーツやミュージカルなど多様な興行が連日開催されていまして、今は収益源、カジノ37%に対し、カジノ以外が63%と逆転しているそうなんです。

それでは、東京、どうでしょうか。東京スカイツリー、歌舞伎座、秋葉原、六本木などなど、いい所はたくさんあるんですが、ブロードウェイやウエストエンドのように、ここへ行けば日本のエンターテインメントが体験できるという集積地がないんですね。仮に、外国人の友達が遊びに来たら、必ずここに連れていくというような世界にアピールできる集積地をつくること、それが「Tokyo Entertainment City構想」の大きな狙いです。

そして、もう一つ、劇場、ホール、集積地をつくる目的があります。それがこちらです。深刻なライブ会場不足問題です。私も歌手をやっているんですが、困っております。日本中のアーティストたちが困っているんじゃないでしょうか。会場が少なく、コンサートがなかなかできないんです。こちらをご覧ください。朝日生命ホール閉鎖、銀座ガスホール閉鎖、三百人劇場閉鎖、シアターアプル閉鎖、新宿コマ劇場閉鎖、閉鎖、閉鎖、閉鎖、閉鎖ということで、2016年問題として取り上げられることも多かったです。10年間で約2万5,000席が失われているんです。

さらに現在は、2019年、2020年問題が深刻と言われております。東京オリンピック・パラリンピックで多くの体育館、コンベンションホールなどが使用できないんです。オリンピック・パラリンピック以降は、5,000から1万人以上の大規模な会場は多数使用できることとなりますが、アーティストが一番使いやすいと言われてるのが2,000から2,500人規模の中会場なんです、全く足りていない状況なんです。

ちなみに、これは本当に私ごとです。2014年12月にAKB48の卒業を発表したんですが、まさにこの2016年問題にぶち当たりまして、卒業コンサートの会場が見つからず、何と1年4か月後の2016年4月まで卒業がずれ込みました。もう皆さん、笑ってくれるとうれしいです。この時、本当に大変で、「卒業するする詐欺」とか言われたり、本当に大変だったんです。どうにか去年の2016年4月にAKB48を卒業することができました。そして、こんなデータもございます。何と、音楽ステージの市場規模は、ここ15年で倍増しているんです。ライブビジネスは不況に強い分野と言われていまして、消費税が8%に上がった2014年以降、節約志向が強まっても、この表のとおり、音楽市場は伸び続けているんです。つまり、ライブの需要があっても、会場が少なくてできないという状況にあるんですね。これは国内アーティストだけの問題にとどまらず、例えば、海外の大物アーティストが日本でライブしたいと思ってくださっても、会場がないので、近隣のアジア諸国に変更になってしまう、そんなケースも少なくないそうです。

というわけで、改めまして、東京に劇場、ホールの集積地をつくる目的は、こちらの3つになります。1、東京を国際的なエンターテインメント都市としてアピールすること、2、外国人観光客の増加、目指せブロードウェイ、経済効果約1兆3億6,000万円、3、コンサート会場不足の解消でファンもアーティストも大喜びという、以上の3つとなります。

最後になるんですけど、私が理想とする「Tokyo Entertainment City」、そのイメージ図、ご覧ください。こちら！ すみません、こんな感じになったんですけど、まず、中央にある一番目立つお城は、外国人観光客も大興奮、宿泊施設です。私が思い描くと、こういうデザインになったんですけど、是非建築家の田根さんにお力添えをいただきたいと思えます。

続いて、画面左側がメインとなる劇場、ホールです。キャパ500人クラスの小劇場、キャパ1,000から2,500人の中劇場、キャパ3,000から5,000人の大劇場。さらに、1万人以上収容できるビッグアリーナも常設。さらに、スタジアムもありまして、大型コンサートの会場としても利用可能ですし、野球やサッカーなどスポーツ競技もできます。

屋内イベントは、もちろんコンサートだけではありません。歌舞伎や能などの伝統芸能、日本ならではのアニメの上映やイベント、そして、お笑いライブなども行います。さらに、ショッピングモールや公園など、ここに来れば何でもできるという、まさにエンターテインメントなシティでございます。幸いなことに、この東京未来ビジョン懇談会には、各界の第一線でご活躍される方々が出席されておりますので、皆様のご協力の下、この夢が少しでも実現に向けて進められたらと思います。小池さんも先ほど、昔の東京の写真を見せてくださいましたけど、こんなに変わるんだと思ったら、今の東京も、私の絵はちょっと雑で申し訳ないんですけども、皆さんのお力添えがあれば、ちょっとでも実現に向けて進められるんじゃないかなと思いました。

以上になります。どうもありがとうございました。

【小池知事】 ありがとうございます。何か、ラジオを聞いているみたいだった。

【高橋みなみ様】 すみません。ありがとうございます。

【小池知事】 そのまま番組になりそうな感じで。ご苦労さまです。最後の絵で、真ん中にお城あったけど、あれ、何？ 江戸城？

【高橋みなみ様】 日本と言えばお城というイメージがありまして、こういうホテルがあってもいいんじゃないかなと思ったんですよね。海外の方、やっぱり日本の文化、好きですし、泊まっているときは、浴衣とかじゃなくて、がつつり着物を着れるとか、そういうのがあってもいいのかなというのは思いました。

【小池知事】 ありがとうございます。もう一度拍手。ありがとうございます。

【高橋みなみ様】 ありがとうございます。

【小池知事】 さあ、それでは、時間の関係もありますので、今度はメダリストの、そしてアスリートの観点から、この東京をどうやっていくのか。夢のような東京、太田さんからお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

【太田雄貴様】 高橋さん、ありがとうございました。この後、やりにくいなというところから始めさせてもらいたいです。皆さん、にこにこしながら聞いてもらえたらうれしいなと思います。

今日、たまたまアメリカから、先ほど知事からも紹介あったんですけども、チェムリーワトソン選手というアメリカの代表選手が来て、彼は今、現役バリバリでやっています。リオの団体の銅メダリストで、過去、もう何度も何度も対戦して、この身長差でいつも苦しめられておりました。今日はたまたま日本に来日していたということで、せっかくとい

う機会で、オリンピックもありますので、一緒に来てもらいました。チェムリー・ワトソン選手です。

皆さん、改めまして、こんにちは。フェンシング元日本代表の太田雄貴です。私は、リオを最後に現役を引退しました。過去4大会に出場して、うち2008年、そして2012年、2008年は個人戦、2012年は団体戦でいずれも銀メダルを獲得することができました。2008年まで、フェンシングというのは魚釣りと同様扱われたりとか、「フェンシングやっています」と言うと、僕、滋賀県出身ということもあるんですけど、「おお、バス釣れるの?」と言われてたりとか、そういう経験をしながらも、フェンシングがようやく皆さんに認知してもらえる状態までは来たかなと思っています。

その中で、知事からも、2050年をイメージしたものをということだったんですけども、僕は東京オリンピックもありますので、2050年を見据えながら、今、僕たちがしなきゃいけないこと、変わらなきゃいけないもの、そして、ハードではなくソフト面で変わっていききたいもの、それが東京オリンピックのレガシーになるんじゃないかと思ったことを、今日、皆さんにプレゼンしたいと思います。

それは、スポーツの応援文化というものです。じゃ、スポーツ応援文化って何? ということで、ちょっと説明してみます。この経緯ですね。昨今、SNSとかの普及で、全員がマスとかメディアを持つ時代になりました。その結果、言いたいことを言ったりできる一方で、人のことを応援するというよりは、どっちかと言うと足を引っ張るとか、そういうことが世の中で多くなってきているんじゃないかなとイメージをしています。

これが最終的にどうなればいいのかというのは、やっぱり出る杭を打つんじゃなくて、引き上げる。頑張っている人をみんなが応援しようよという空気。批判が悪いのではなくて、意味のない批判はやめて、頑張っている人を純粋に喜べる心を育てたい、そういうふうに思いました。戦略としては、スポーツをまず成功事例にして、スポーツを切り口に一般の社会に落とし込んでいきたいと、そう思いました。

これは、応援の持つ力を、皆さんに一つのデータとして挙げたいと思います。それは、ホームアドバンテージというものです。アメリカのスポーツのデータ、長い歴史のもので、1966年とか、色々なものなんですけど、MLBだと、ホームチームが勝つ確率が約54%なんですね。サッカーにおいては、MLSだと約70%、ホームが勝つんですね。これは、ホームが勝ちやすいような仕組みにしている種目もあります。しかしながら、やはり応援の力が大きいと言われていています。

そんな中、先々月、こういうことがあったんですね。僕、サッカーが結構好きで、皆さんも知っているバルセロナというチームが、チャンピオンズリーグのベスト16で、パリ・サンジェルマンに4対0で負けたんですね。このときに、バルセロナの選手も含めて、今回のチャンピオンズリーグは厳しかった、難しかったなど言ったんですね。それが、何とバルセロナのホームに行ったら、6対1なんですね。パリ・サンジェルマンが6失点するというは普通考えられないことですね。これをやってしまった、大きかった理由というのは、やはりバルセロナの9万人入るカンプノウのスタジアムの応援だったんですね。地面が揺れるような感覚。もちろん僕は行ったことはございません。テレビでも、画面越しでも伝わる、あの応援の持つ力、これをものすごく体感したんですね。

それでは、サッカーでは、そういったサポーターのことを、12番目の選手と呼んでいるんですね。日本でもそう言っています。では、日本ではどうなんだろうと。ちょっと見てみたいですね。これ、2016年のサッカーのJ1のホームアドバンテージはどれだけなんだろうと調べたら、何とホーム118勝に対してアウェイも118勝。同じ70引き分けなんですね。全くのイーブンだったんですね。こんなにもホームアドバンテージがないというのは面白いなと思ったんですね。

もうすぐ日本は東京オリンピックがあります。しかしながら、東京に、日本人にとっても、ホームアドバンテージってもしかしたらあまりないのじゃないのかなと思って、これはどういった理由から来ているのかなと思い始めました。

それで、こんなこともありました。ちょっと訳あって映像は使えないんですけども、2013年に東レ・パンパシフィックのテニスの試合で、皆さん、ご存じの女性の選手に、観客がため息をついて、「あー」と言ってしまった。それに対して、僕はものすごく分かったんですね。選手は応援していただきたい。でも、日本では、相手の立場で物事を考えなさいという教育を受けるので、その選手が勝つことよりも、自分が楽しもうと思って、その人の気持ちになって応援するんですね。そうすると、自分が失敗したわけじゃないんですけど、同じ気持ちになって、ため息ついちゃうんですね、ハーッて。しかしながら、それは選手の勝利には直結しないんですね。僕たちが一番ため息をつきたいと、選手たちは思います。俺だって。そんなときには、やはり海外は、「あー」じゃなくて、そこから「アレ」とか「頑張れ」とか「フォルツァ」って上げるんですね。ここからだ。日本は、サッカーの枠を外れてしまうと、「あー」ですね。海外だと、打ったこと、トライしたことを褒めるんですね。じゃ、何でこんなことが起こるんだろうというのを、ちょっとご説明し

ていきたいなと思います。

これ、スポーツをそもそも観戦する機会が少なかったんですね。逆に、野球なんかはホームアドバンテージがしっかり存在します。阪神甲子園球場なんかを見てもらえば分かるんですけど、これはやはり長いこと、そのスポーツが日本に根づいているからなんですね。アメリカでは、MLBで7回が終わると、「Take me out to the ball game」、私を球場に連れていってと、子供目線のものがかかってくるんです。日本は今、知事も進められている働き方改革。お父さんが働くので、子供の手を連れてスポーツを観戦する機会が今までほとんどなかったんですね。そんな中、大人になった世代は、初めて試合会場に応援は行くけれども、どうやって応援していいか分からないんですね。

僕も、柔道の友達が出ていたので、福岡まで柔道の応援に行ったんですね。皆さん、柔道関係者です。どこで声を出していいのか、どこで応援していいのか、応援の仕方が分からない。これ、もしかして東京オリンピック、直結するんじゃないの。当たり前のように集客できると、みんな思っているんだけど、フェンシングも1日に1万2,000人集客しなきゃいけません。フェンシング、今まで、過去、国内の大会、400人しか集客したことございません。約30倍でございます。これ、誰が力を貸してくれるんだろうと、今、僕は奮闘しているんですけど、こういった問題が実はあります。

しかしながら、集客しても、応援を全くどうやっていいか分からないので、みんな、黙って見ているんですね。日本だと競技説明はあるけれども、応援の仕方まで落とし込んだものがないので、ここ、ちょっとやりたいなと思ったんですね。もちろん、応援なんて、自分で勝手に応援したいよとおっしゃる人もいると思います。しかしながら、僕は、応援の色が出るには、まず基本が成り立たないとできないんじゃないかなと思っております。

これ、まだアイデアベースなんですけど、こういったふうに、選手たち、これは今日はそこまで落とし込めてないんですけど、例えば、競技がパパパッと出て、スマートフォンとか簡単なデバイスで見れるようになっていきます。そうすると、種目がこうやって2つあるんだねというふうに、色々なものが。例えば、体操ですね。女子と男子があります。上から、床がありますとか、こんなふうにたらーと書いてあると。

じゃ、フェンシング。僕、フェンシング選手ですので、是非フェンシングを見てもらいたいなと思うんですけど、じゃ、フェンシングって、実は、フルーレとエペとサーブル、英語表記だと「Foil」「Epee」「Sabre」になります。じゃ、エペという種目ってどんなものか見てみましょうと。

【ナレーション（太田雄貴様の動画音声）】 駆け引きのエペ。全身が的。突けば得点。同時得点もあり。それは、ピスト上の決闘。頭脳戦、接近戦、その緊迫感を楽しもう。

【太田雄貴様】 こういった映像があるんですけど、これは東京オリンピックの閉会式を担当したライゾマのチームと一緒につくっていて、これは応援ベースまで落とし込めていません。競技説明までで止まっています。これに、ここを突いたら、ここで声出しているとか、フェンシングの場合は全部フランス語で、審判が「アンギャルド」って言うと、しーんとしなきゃいけないんですね。「プレーアレ」って言ったら声を出しているとか、そういった決まり事を、応援をする人側の目線に立ったものを、やはり分かるようにしてあげないと。それを、日本語、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語など、世界の色々な言葉にしてやってあげることで、観客もやっぱり準備をする、応援しようという気になる。その結果、選手たちのパフォーマンスが上がる。こういうことを、是非東京オリンピックでまず実現したいなと思っています。

頑張っている人をねたむのではなく応援する社会へ、まずスポーツ選手が応援されて、その成功例を一般の中に落とし込みたいと。日本のメダルも大切なんですけど、世界中の人たちが、日本の応援って良かったよねとってもらえるような、そんな東京オリンピックを目指したいなと思っています。

しかしながら、日本もいい例があったんですね。これは、帰る時に、日本人がスタジアムの観客席の清掃をしていったんですね。これはものすごい世界のお手本になることだったんですね。日本の応援の仕方も、こういったものが世界に先駆けた色々なお手本になれるようにできたらいいなと思っています。これが僕のやりたいレガシーです。

最後に、これはちょっと補足なんですけど、僕、2013年、ブエノスアイレスで泣きながら東京オリンピック招致を決めたとき、マニフェストを掲げていたんですね。知事、マニフェストって非常に守らなきゃいけないものかと思うんですけど、僕、こういうことを言っているんですね。「私、太田雄貴は東京招致できたら、フェンシングで知事と対決します」。その時とは知事が違うと思うんですけど、まだ、これ、実現しておりません。実現していないので、今年に関しては、東京オリンピック1,000日前イベントもごさいます。是非僕と対戦していただけたらなと思います。

以上、太田雄貴のプレゼンテーションでした。ありがとうございました。

【小池知事】 ありがとうございました。「アレ」でやるわけね。太田さん、まずはご苦労さまでした。とてもインスパイアリングなポイントでありました。後ほど、皆さんとデ

イスカッションして参りましょう。そして今、大学の講義を終えて、山科ティナさん、到着です。ニューメンバーです。どうぞよろしくお願いいたします。

【山科ティナ様】 よろしくお願ひいたします。

【小池知事】 じゃ、どうしようか。じゃ、1分間、自己紹介。

【山科ティナ様】 山科ティナと申します。よろしくお願ひいたします。現在、東京藝術大学の2年生なんですけれども、一昨年までは多摩美術大学のグラフィックデザイン学科に1年間通っておりまして、そこから去年、藝大に入りました。ふだんは漫画を書いているんですけれども、16歳の時に『別冊マーガレット』という雑誌でデビューして、その後、色々描かせていただいて、大学入学後は結構ウェブで漫画を公開して、そこからまた書籍化したりとかそういう活動をしております。よろしくお願ひいたします。

【小池知事】 ありがとうございます。ニューメンバーでございます。

さて、それでは、この後は長谷部渋谷区長からのプレゼンテーションをお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

【長谷部健様】 皆さん、よろしくお願ひします。今、お二人の話を聞いていて、まさに考えていること、似ているところ、たくさんあります。かぶっているところもあるんですけれども、それを吸収して、渋谷でやりたいと思っているところがあるので、是非聞いてもらえると。

これは、やっぱり50年先、100年先のことを見据えて、今仕掛ければ50年先につながるんじゃないかということで、あくまでも区長ですけれども、僕の私案で考えています。こういうことをもって、これから議会だったり東京都だったり色々な話し合いをしていきたいなと思っているものです。

最初に映像を見てもらって、その後、ちょっと説明します。

【ナレーション（長谷部健様の動画音声）】 インターネットから始まったオープンイノベーションの波は、様々な技術革新をもたらし、今や「第4次産業革命」とも呼ばれる新しい時代が始まろうとしています。常にトレンドの発信地として注目を集め、今も再開発プロジェクトを通じて未来都市へと変貌し続けるまち、渋谷。このまちから、世界に先駆けて新たなサービスを育て、文化として発信していく。

【長谷部健様】 これは実際もう計画されていて、できることが分かっている建物たちです。

【ナレーション（長谷部健様の動画音声）】 渋谷をそんな「Incubation City Tokyo」

へと変えるために、「渋谷区クリエイティブシティ特区プロジェクト」が始動します。

【長谷部健様】 勝手に僕の中で始動しているという話ですけども。すみません。

【ナレーション（長谷部健様の動画音声）】 多様化するコミュニケーションに対応し、次世代エンターテインメントを実現させるため、5Gネットワークの社会実験プロジェクトを計画。接続環境を意識しないシームレスなインターネット接続と高速かつ大容量のデータ通信を可能にすることで、様々なIoTサービスを実現します。

次世代型エンターテインメントの媒体として、まちの景観に溶け込んだ壁面デジタルサイネージを設置。東京オリンピックではパブリックビューイングとして、災害緊急時にはアラート装置として、公共性の高い目的のために活用しながら、収益の地域還元も行うコミュニティサイネージとして機能します。

クリエイティブシティ渋谷のシンボルであり、最新テクノロジーを駆使した世界標準のエンターテインメント施設、スポーツイベントから音楽フェス、ライブイベント、カンファレンスに至るまで、様々な利用シーンを想定したハイブリッドな空間です。

さらに、渋谷はインキュベーションシティとして、次世代テクノロジーを活用しながら、未来型都市へと変貌します。ブロックチェーンの技術を生かした地域通貨と決済機能を実現するBit Money SHIBUYA、インバウンド旅行者向けに多言語翻訳機能を備えるARレストラン検索、著名人のホログラムと記念撮影ができるメモリアルスポットを設置し、収益をチャリティーに還元するBit Valley Museum。アスリートやアーティストなどの登場人物を再現し、会場に行かなくても観衆との一体感や臨場感を体験できるDigital Stadium。ファッションストリートにARを使った新しい形のO2Oマーケティング施策を実現するAR Street Fashion Show。エコロジカルかつ安全で快適、エンターテインメント性のある移動手段を可能にするNew Mobility。また、起業家を育成するインキュベーションセンターの運営を通じて、ヨーロッパ、アメリカなどのハイテク都市を結び、アジアのテクノロジーハブとしての機能を担うプログラムも提供していきます。インキュベーションセンター渋谷、Engineer Education。そして、世界を代表するエンターテインメントシティを実現するため、劇場、ホール、映画館、ライブハウス、クラブなどのエンターテインメントスペースを併設した施設の開発に際し、容積率を緩和して、コワーキングスペースやソーシャルアパートメントなどに向けた増床を可能にします。

私たちが夢見た未来を実現する2020クリエイティブシティ渋谷は、東京、日本を世界へ発信する国際成熟都市として進化していきます。「ちがいをちからに変える街。渋谷区」

【長谷部健様】 良くできているでしょって、自分で言っちゃいけないんですけど。色々な素材を集めて、友達に手伝ってもらいました。もちろん、こういうので見せ物で勝とうという汚いおじさんの手口なんだけど、これ、今の復習で少しだけ、幾つか説明します。

今の話で言うと、大きく言うと、5Gというのがもうすぐそこまで来ているんですね。この辺は、落合さんから色々フォローしてもらえるといいですけど、これができることによって、多分多くのことが変わってきます。容量も全然増えるし、通信の速度も変わるし、まち場でも色々動画を見たり何したりというのは、どんどん変わります。これがもう、今の技術的にはすぐそこまで来ているので、いち早く渋谷ではこれをやりたい。次世代デジタルサイネージ、フューチャー・スタジアム、この辺をちょっと説明していきます。

これはちょっと飛ばしておいて、渋谷の駅周辺の建物に、やっぱりデジタルサイネージをつくったり、プロジェクションマッピングをすれば、色々な楽しみ方ができるし、やっぱりさっきも言った防災のところでも非常に役立つ。そういった意味で、非常に興味を持っています。

これを今すぐ考えていて、もう具体的に、代々木公園のNHK側の所なんかはいいスペースがあるので。これはヨーロッパにある、とあるサッカー場ですけれども、芝生が入れられるんですよ。だから、ふだんはサッカーはやるときは芝生を中に入れて。サッカーのことを考えると、世界中の色々な主要なリーグがありますけれども、都心にグラウンドがない、チームがないというのは唯一、東京、日本だけなんですよ。なので、やっぱり都心オブ都心と思っている渋谷区ですから、そこにやっぱりこういった施設が欲しい。サッカーをやってないときは、これさえ出せば、コンサートもできるし、3万人規模のコンサートホールになると思いますけど、そういったものがあれば、色々なものに役立つ。もっと言うと、災害時に、昼間人口が多い場所ですから、そういったことも考えて、やっぱりスタジアムというのは都心に欲しいと思っています。

これはビットマネーですけれども、きっと、これ、どんどん、どんどん主流になってくると思うんです。いつか、地域通貨という話がありましたけれども、これも積極的に渋谷でやれたらいいなと思っています。この収益がまちづくりに還元できる。渋谷は実は、ふるさと納税は取っていかれてばかりなので、やっぱり違う財源の確保も当然必要かなと思っています。

この辺は、ARで色々できたり、これもチャイニーズシアターみたいなものがARでできれば、その収益がまたまちづくりに還元できるみたいになればいいと思っていたり。

これも、パブリックビューイングを色々な所でできるチャンスがあると思うんですね。こういう形でDigital Stadiumということも考えています。

道行く人も、色々な所に、どんな洋服を着ているんだろうということ、気になると思うんだけど、ファッションモデルが歩いていたら、それをこうやって見ると、どこで売っている、幾らというのも分かって、その場で買える。そういったファッションショーみたいなものもやっていくと、要するに、今までの読者モデルとか、原宿とか渋谷に行くと、みんな、注目されるでしょ。そういったものがちょっと変わってくるんじゃないかななんて思って、こんなことを考えています。

これは、色々なモビリティがあります。これを実現したいなと思っていて、セグウェイとか色々なのがありますけれども、福祉の分野で言うと、やっぱり今まで、車椅子だ何だというのは、ちょっと補助するものだったと思うんですよね。これが本当に機能拡張であったり、みんなにとって格好いいもの。それはやっぱり渋谷を舞台に、どんどんこういうものが提案できれば、みんなの意識が変わる。福祉に対して思うのは、みんな、頭で分かっているけど、やっぱりこれは、もっとここで感じなきゃいけない。それはやっぱり見て感じる事が大切だし、マイノリティの問題じゃなくてマジョリティの人の意識を変える課題だと思うので、やっぱり渋谷をステージにしてもらえたら非常にいいかなと思っています。

時間がないので説明しませんが、簡単にしますが、最後のARバスというのは、実は外を走る画面が全部ARで見れるようになっていて、渋谷を走るバスだけど、なぜか火星を走っているみたいになる。今、テクノロジーではほぼできるんですよ。こういったことは新しい観光資源になるかななんていうことも思っています。

もっと大切なのは、やっぱり今、IT系のベンチャー、たくさん渋谷に来ています。だけど、土地の値段も高くて、今、建て直しをしているからオフィスも足りなくて、なかなか厳しい状況にはあります。なので、こうやってみんなが集まれる場所をつくって、そこでプログラムをつくる。渋谷の名前を使えば、海外と、ロンドン、パリ、ニューヨーク、サンフランシスコ、色々な所とネットワークをつくれると思うし、実際、それが今、動き出しています。それも、できたら、土地は渋谷区で持っている所は限られているので、東京都、一杯あるのかななんて思うので、是非一緒に組んでできればいいかなと本当に思っています。

このエンターテインメントシティ、さっき、たかみなさんが言っていましたけど、僕、

大賛成です。やっぱり渋谷が、カルチャー、文化、エンターテインメントを引っ張りたいと思っているので、是非新しく建物をつくるときに、ホールだったりクラブスペースだったりをつくったら容積を上げて、更に言うと、僕ら、最上階に人に住んでほしいんです。やっぱりまちの中心に人が住んでもらうということは、安心・安全の意味でも大切です、まちに温もりをちゃんと残していくということは大切なので、そういったことができれば、新しいビルというのは容積を緩和していく。そうすると、自然と渋谷がブロードウェイになったりとか、そういうことがあるんじゃないかなと思います。

夢みたいな話をば一っとしましたけど、これ、技術的にももうすぐそこに来ている話です。これをつくれれば、50年、100年先に東京がアジアに誇る、世界に誇るエンターテインメントシティになると思うので、これを是非実現したい。これは、渋谷区と東京都が本気になれば、僕はできると思っています。

以上です。ありがとうございます。

あっ、そうだ、待って、待って。こういうことも大切なんですけども、今、テクノロジーの話ばかりしましたが、やっぱり人の温もりというのが大切なんです。やっぱり隣近所とコミュニティをもっとつくっていこうということで、こういうかっ飛んだことも考えていますけど、この、みんなにお配りした、「SHIBUYA Otonari Sunday」、こういったことも渋谷は今年から始めようと思っていて、これは6月の第1日曜日を渋谷区はこれから「おとなりサンデー」と位置づけます。パリの隣人祭りというのをモチーフにしているんですけども、パリでは、やっぱり東京と同じように、孤独死があったりしたんですよね。それに心を痛めた人が、年に1回、マンション、アパートメントの中庭に、自分の飲み物、食べ物を持って集まってパーティーしましょう。あっちの人はパーティーが上手なので、ワイン片手に盛り上がるんです。その後、どんな変化が起きたかと言うと、次の日から挨拶する人が増えたと言うんですね。そこから会話が始まって、あのおばあちゃん、気難し そうだなと思っていた人が実は子供好きだというのが分かって、お母さんからすると、夕飯の準備をしているときに子供の面倒を見てもらう。こうやって、隣近所で解決できる行政課題ってたくさんあるんですよ。

だから、そういったこともしっかり仕掛けをしていく必要があって、でも、渋谷、東京で、みんな、パーティーしましょうと言っても、パーティーするの、上手じゃなかったりするんで、渋谷区の場合は、何してもいいと言おうと思っています。家の前でフリーマーケットをしてもいいかもしれないし、公園とかもし使いたかったら貸すから、そこで青空

マージャンをしてもらっても構わないし、大きな道路を通行止めにするのは難しいですけど、住宅街の所で、全部お宅がそれぞれいいと言え、僕らが警察に掛け合いますから、そこを通行止めにして、キャッチボールできるようにしてもいいかもしれないし、そこでさっき言った、昔遊びを教えたりとか、女の子なんか、ゴム段して、道路で遊んでいましたよね。そういったことを子供たちとやれば、PTA世代が出てきて、そうすると、町会とかを含めて、高年齢化している所とうまい接着ができるんじゃないかな。これは地味だけど、3年、5年、10年と続くことで、きっとみんなのコミュニティの強化につながる。だから、こういったかっ飛んだこともやるけど、こういう温もりのあることも、やっぱり並行してやっていく必要があるんじゃないかな。

最後、もうちょっとだけ。これが、実は20年先を考えて、渋谷でつくったビジョン、基本構想なんです。「ちがいをちからに変える街。渋谷区」というのを20年先のビジョンにしている、これを実現するために7つのカテゴリがあるんです。教育とか福祉とか防災とか。それを全部うまくできれば、多分これがなし遂げられるということでつくりました。このビジョン、これはあくまでも渋谷のビジョンですけれども、このビジョンの皆さんの参考になったりインスパイアされるきっかけになってくれたらいいなということで、今日はお持ちしました。普通、これ、すごい硬いものなんです。色々な地方自治体、それぞれオリジナルで持っているものなんですけれども、あえてポップにつくったのは、多くの人に読んでもらいたいし知ってもらいたい。特に子供たちに読んでもらえれば、20年後、そこで主力になるのは彼らですから、これを感じて大人になってくれたらいいなという思いでつくっています。これも良かったら見てください。どうもありがとうございます。

**【小池知事】** ありがとうございます。現役区長さんですけれども、こんなにクリエイティブな、そしてプレゼンテーションは抜群な、すごいですね。さすがです。ありがとうございました。

その中身についても、本当に渋谷がわくわくするなという感じであります。現実的に言えば、容積率とか広告規制であるとか、もう山ほど、一杯一杯、なぜできないかは、理由はすぐつくものは一杯あるんですけど、それを超えるのがこのビジョンですからね。お三方、ありがとうございます。まず御礼申し上げます。

共通していたのは、とても楽しい、夢、そしてスポーツを通じて、ジョイというか、楽しむというところだったと思います。やっぱり社会、楽しまないよねという、そこら辺が共通だったかなと私は感じておりました。とてもわくわくするようなプレゼンテーション、

本当にありがとうございました。

さあ、それでは、お三方のプレゼンテーション、たかみなさんはエンターテインメント、その会場がないぞという話、太田さんのスポーツは応援の仕方さえ分かっていない、どうやって盛り上げたらいいか、長谷部さんには、5G……、5Gってすごいな。5Gの世界はもうすぐそこに来ているので、そこをもっと活用したり、それから、もう一方で、渋谷もそうだし、東京って意外と町会の組織がしっかりしているので、結構べたなところがあって、そこはむしろ、どうやって守っていくかが課題だと思います。

さあ、皆さん、3人のプレゼンテーションで、自分だったらこうするとか、ここが面白かった、それぞれご意見いただければと思います。

伊勢谷さん、いきますか。

【伊勢谷友介様】 皆様、ありがとうございました。本当に楽しく聞かせてもらいました。高橋さんから、ライブビジネスが市場規模として15年で倍になっているという状態にもかかわらず、必要なのに会場がないというのは、是非つくった方がいいんだろうなという、もう単純明快な感覚が得られたので、人口が減っているのにこの結果というのは、何か時代を感じさせるのか、何なのか。もしかしたら、人間の癖と言うんですか、根幹的な癖というのは、もしかしたらそういうところを求めるのかなみたいに思ったので、数字的にも、これはどうにかしてやった方がいいでしょうね、事実、と思いました。

だから、興行をつくるだけですよ。渋谷でやりたいんですもんね。もうばっちりですよ。

【高橋みなみ様】 本当に長谷部さんの後じゃなくて良かったなと思いました、プレゼン。

【伊勢谷友介様】 先がね。

【高橋みなみ様】 はい。危ないと思って。全部まとめてくださっていると思ったので。是非。

【長谷部健様】 いや、でも、あの絵が湾岸っぽいことを意識して、海とかあったから、ちょっとチェツと思ったんだけどね。

【高橋みなみ様】 いや、渋谷、お願いしますよ、ちょっと。

【長谷部健様】 いやいや、もちろんです。

【伊勢谷友介様】 あと、太田さんの、面白かったのは、やっぱり確かに僕も見ている、失敗したら、あーっと思っているし、それって当事者の気持ちになっているんですけど、

実はチームメイトだったら、それ言わない。ドンマイって言ってあげたいわけですよ。だから、そこら辺の精神的な差があるんだなというのを明らかにしてもらった感じがして、だとすると、せっかくのイベントのときに応援の仕方が分かっているというのは、ちょっとオリピックの楽しみ方を提案するということでは、とてもポジティブで楽しめるエンターテインメントになっていくんじゃないかなと。だって、歌舞伎とかだって、「成田屋！」とか、花火では、日本の決まりで、あれ、言うわけですから、何かね。言わないですけど、僕は。でも、言ったら響くということが分かったのは、とっても面白いエンターテインメントになるんじゃないかなと思いました。

それと、長谷部さんはとてもすばらしい、最高のプレゼンテーションだったと思うんですけど、様々なできない理由があるということではありましたけれども、本当に色々な可能性を感じさせていただけのプレゼンテーションだったと思います。ビットコインで利益を出していくというところなんですけれども、ビットコインをやられたら東京都には落ちなくなるんですね、お金は。

【長谷部健様】 渋谷マネーであれば渋谷ですけど、でも、それは全部まちづくりに還元するという事なので、要するに、渋谷が良くなれば東京も良くなると。

【伊勢谷友介様】 なるほど。よろしいでしょうか。今のところ、だから、ビットコイン、許されているんですか。

【長谷部健様】 いやいや。

【伊勢谷友介様】 ああ、そうかそうか。でも、むしろ僕、応援していることなんです。何かそれぞれが地域の中で、自分たちの財政をきちんと成立させていくことが、追い追い全体としての強さになってきますし、どこが、そこら辺、ちゃんとバランスがとれてないというのがはっきり分かれば、努力の方向性も各地域によって分かるというのは、僕、ビットコイン、いいアイデアだなと思わせていただきました。

5Gの話は落合さんに聞きたいなと思いつつ、あと、僕、これ、最終的に、全体的に、今、人間たちが何を求めているのかなと言ったときに、ついこの間、オランダ視察に行ってきたんですよ。そこで、彼ら、2つとも取材先が常に言うのが、ヒューマンビヘイビアと言うんですね。つまり、人間の脳皮質で培われた後天的なことではなくて、根幹にある本質的な我々人間の癖、これをきちんと整理して、自分たちが理解してあげると、きちんと正しい制度のあるシステムないしは仕組みというものがつくれるんじゃないのかということがおおむね彼らが伝えていたことで、実際に彼らが癖を使って何をしているかと言

うと、我々みたいに、色々なキーパーソンが集まって、実際政府が抱える問題をフューチャーセンターというところで民間が話し合っ、最終的に解決策までつくってというのをやっているという。

それを、懇談会にいる我々としては、我々ってその前身に当たることをやらせていただいているのではないのかなと少し思ったんですね。ヒューマンビヘイビア（「フューチャーセンター」の言い間違い）にどうつなげていくかということなんですけれども、僕は、人間は自由と責任を与えてあげないと、どんどん頭が悪く、賢くなくなっていくと。つまり、何か問題があっ、自分でそれをどう解決して、どう行動するかという、この繰り返しのよって人間は徐々に成長していって、最終的には地球とバランスをとり始めるというところが理想だと思うんですけど、このところ、今、ヒューマンビヘイビアとフューチャーセンターとごっちゃにはなりましたが、僕としては、このメンバーが追い追い、フューチャーセンターみたいなアクションだったりキーパーソンが集まって何か解決していく縮図になっていったら面白いなと思いました。

ちょっと中途半端になりましたけれども、色々吹き込み過ぎましたけれども、そんな感じ。ありがとうございました。

**【小池知事】**      ありがとうございます。是非コメントしたい方。

宿輪さん。

**【宿輪理紗様】**      宿輪と申します。先ほど、渋谷区長が、「Incubation City SHIBUYA」の中に、技術者育成プログラム、ITベンチャーの方を集めた施設をつくりたいということをおっしゃっていたと思うんですが、私、大学生目線から思いますと、大学生もその中に含めていいのではないかなと感じております。と言いますのも、今、就活を終えたところなのですが、就職活動中に同期からもらった意見とか、同期が思っていることを聞いたところ、日本のため、世界のために何かしらやりたいけれども、今まで得てきた自分の経験だったり、今まで持ってきた、学んできた専門性とかを何にどうやって生かせば、どことつながっていけばいいのか分からないということをよく聞きました。ですので、このような技術者育成プログラム、そういう施設をつくることよって、色々な幅広い専門性だったり経験を持っている方々がつながれる環境をつくることよって、非常にいいことかなと思っております。

また、先ほどの太田さんの話ともつながってくるんですが、頑張っている人を応援するという意味では、渋谷区だったり都だったり、そういう環境を整えてあげることよ

て、頑張っている人がいかに頑張っている、その意欲を行動だったり、何か物だったりにつなげられる。そういう環境を整えるのも、都だったりがもしかしたらできるのではないかなと感じました。

【伊勢谷友介様】 大人はもうちょっと頑張れと。はい、頑張りましょう。

【小池知事】 さあ、いかがでしょうか。落合さん、ビットコインと5Gも、みんなに分かるように説明してくれる？

【落合陽一様】 いやいや、5Gは速くなると思っていただくと良くて、ビットコインは別に地域通貨だと思っていただければ。現金を使わないので脱税しないと思っていただければ、それでいいかなと思います。

今、ちょうど同じような問題にぶち当たってまして、僕、筑波大で学長補佐をやっているんですけど、筑波大って、今、アリーナをつくる計画が、ちょうど日経に載っていたと思うんですけど、大学でアリーナを建てるんですよ。これ、ポイントは、うちの大学って国立大学なので、独立行政法人で、独立行政法人の敷地内にアリーナを建てて、収益化しようというモデルを今つくろうとしていると。しかしながら、この箱物問題はすごく大きくて、例えば、4,000人以下の箱物だと収益構造をとるのが難しい。つまり、それを建てても赤字にしかならないので、すごくうまく考えないと難しい。

逆に言うと、今、例えば、長谷部区長が言ったような施策って、どの地域にもやらないといけないことなので、このテクノロジー時代には色はないんですよね。どうやったら渋谷区色があるのかというのを、逆に言うと、ちょっと考えながら聞いていたんですけど、その点、AKB48がめちゃくちゃ良かったのは、箱物とアイドルがセットで土地にキャラを出したことだと思うんですよね。だから、多分、どうやったら独自の文化をつくれるようなアイドルユニットなりジャニーズなり何でもいいんですけど、それと箱物がくっついていて、それをしばらくほっとくと発酵して、良く分からない掛け声を上げるようになったりとか、良く分かんない光るバンドを振るようになったりとか、そこまで行けば文化感が出てくるんですけど、同じような建物と同じようなテクノロジーを入れても、そんなにキャラは出てこないだろうなと思っていて、最近、すごく悩んでいるんですよ。

だから、筑波らしさって何だろう。僕らの筑波大って、ここ30年前ぐらいに万博をやって、科学技術と言ってつくったまちだから、そこはキャラクターなんです。メディアアートとかはすごく強いんですけど、それ以外の土着のキャラはなかなか見出しがたいとか。逆に言うと、今、都内の再開発のプロジェクトと関わっていると、山手線って多分、全部

同じような駅になっていくんですね。全部アトレ化していくというか、全部同じ見た目になっていくんですけど、この同じ見た目になっていく23区を同じようにテクノロジーを入れても。同じ見た目にならなくするにはどうしたらいいかの方が、多分我々はフォーカスしないといけないと思うんです。

だから、その土地に根づいたコミュニティを同時に育てるには、多分、名前を付けるとか、歌わせるとか、踊らせるとか、すごくいいと思いますね。たかみなさんが最初に言っていたのが逆に最初に返ってきて、結構いい感じです、多分。

【高橋みなみ様】 あっ、本当ですか。

【落合陽一様】 うん。逆に言うと、箱だけ建てても、踊って歌える人たちに向かって人が集まってこないと、多分、文化感は出ないと思う。

【高橋みなみ様】 アイドル、私、もともとやっていて、今もAKB48というのは……。

【伊勢谷友介様】 知ってますよ。

【高橋みなみ様】 ありがとうございます。あるんですけど、もともとアイドル文化だって、応援というちょっと謎の掛け声があると言っていましたけれども、昔から実はあるものなんですね。でも、それがやっぱり色々な年代のファンの方が増えたときに、どんどん伝染していったんですよ。さっき、太田さんも応援の仕方という話もありましたけど……。

【落合陽一様】 それぞれ、それぞれ。

【高橋みなみ様】 教えないと駄目なんですよ。つなげていくという。

【落合陽一様】 そうそう。だから、太田さんの話をしようと思って、たかみなさんの例を出したんですけど、明らかに太田さんだったら応援したくなるじゃないですか。要は、キャラクターをどうやってつけたら、決まった応援活動になるかというところがすごくキーワードだなと思っていて、フェンシングと言えばこの応援スタイルがあるみたいな話とか、歌舞伎って、さっき、すごい良い例だったと思うんですけど、歌舞伎の掛け声の仕方みたいなのに近いですよ、AKBのやり方と違って。

【高橋みなみ様】 そうですね。

【太田雄貴様】 AKBって、最初、誰がつくったんですか、あの相づちみたいな。

【高橋みなみ様】 いわゆるオタ芸というものだったりミックスっていう、「ファイヤー！ サイバー！」みたいな掛け声があるんですけど、でも、本当に昔からあって、私も誰がつくったか分からないんですけど、でも、どんどん本当に上の世代のおニャン子クラ

ブのファンだった方が、今の10代、20代のファンの人に、こういうふうにイントロで言うんだよということをやったりとかしていくので、やっぱり教えてあげると一緒に盛り上がれますし、楽しいというのが一体感、グループが生まれるというのはあるので、それってもしかしたらスポーツもそうですよね。一緒に教えたりとか。

【太田雄貴様】 それですね。僕、逆に、AKBさんの見たときに、これ、スポーツじゃないなと思ったんです。足りないなと思ったんですね。お客さんを喜ばせるという意識も、僕らにはなかったなと。いいプレーをすることだけ考えていたし、でも、それでいいと思います、アスリートは。だから、周りがいかにして応援に参加するかというところをつくってあげなきゃいけないって、さっき、落合さんの話によると、もしかしたら東京都、23区あるので、1区1競技じゃないですけど、何々区はフェンシングとか何々区は……。

【落合陽一様】 全面的に賛成です。めっちゃいいです。

【太田雄貴様】 そうですね。そういうものにして、この区はもう特区で、この競技やろうぜみたいな、ちょうどオリンピック、28かな、色々な競技あると思うんですけど、渋谷区は2つとか、分かんないですけど、そういうふうやっていくのも、本当は僕、スポーツの聖地化まで入れたかったんですけど、ちょっと時間もあつたのでやらなかったんですけど。

【長谷部健様】 スポーツで言うと、どこをフランチャイズするか、何を持ってくるかによって個性が出ると思うんです。渋谷はおかげさまで、あそこで演劇をやりたいとかコンサートをやりたいとか当然多いので、まずエンタメは引っ張りたい。ただ、今の現状で言うと、例えば、ダンサーとかアーティストとかも、みんな海外を目指しちゃうんですよ。多分、言うように、場所がないから。今、チャンスなんです。アジアの東京とか渋谷になれるチャンスなんです。でも、それが越えていっちゃっている現状があるから、やっぱり一度、せめて東京・渋谷を通過してから行こうみたいなことができるって、またそういった個性が出てくると思うんですよね。

だから、渋谷のことばかり言って申し訳ないけど……。

【小池知事】 区長なんだからしょうがない。

【長谷部健様】 でも、似たような都市で言うと、渋谷、新宿、池袋がこういう空気になるのは、僕、すごくいいなと思っていて、丸の内とかはもっと金融とかビジネスの、六本木はまたちょっと違うエンターテインメントの仕方があると思うので、何かそうやって分かれてくると、東京みたく、こんな全部広いエンターテインメントシティはないので、

その中でめり張りをつけるというのがいいんじゃないかなと思います。

【小池知事】　じゃあ、パクンお願いします。あと、菊地さんには、ピアニストの観点からお話を伺って。じゃあ、いい？　菊地さん、どうぞお願いします。

【菊地裕介様】　皆さんのプレゼン、とても共感を持って見せていただきました。たかみなさんのおっしゃっていたエンターテインメントの集積というのは、僕も未来に向けてすごくインパクトのあることだと思うんですけど、同時に僕は、集積するだけじゃなくて、本当に各まちの、皆さんの暮らしている所にエンターテインメントが自然に存在するという、そういう多様性みたいなものも同時に進めていけたらいいと思うんですね。いずれ、僕、プレゼン、その辺でさせていただこうと思っているんですけど、本当に各駅に1つ、劇場なり何なり。それは箱だけじゃなくて、そのコミュニティですね。それは、子供を育てるところから、赤ん坊からお年寄りまでがみんな参加できるような、そういうイベントというか、発表会というか、組織というか、そういうものを各ステーションにつくっていくような、そういうのもいいと思っています。

規模の問題で、我々の業界、本当に零細業界なので、500人と言ったら、もう相当集客するのが大変なんですね。50人とかそれぐらいの規模のライブの会場を渴望しているアーティストはたくさんいて。今日も実は、僕、これからコンサートなんですけど、それこそ渋谷区神宮前、表参道でやるんですけど、そこにもすばらしいサロンはあるんですけど、いかんせん使用料がめちゃくちゃ高い。本当にすばらしい場所なんですよ。今日は僕、乗っかるだけなので、お金のことは考えないでいいんですけど、そういうところで、先ほどおっしゃっていた容積率の緩和だとかということで、そういう大きなものだけじゃなくて、僕は小さいものにも光を当てていただきたいなということを感じました。

それから、太田さんのおっしゃっていた応援の文化ということなんですけど、これは実はクラシック音楽でも当てはまることで、みんな、しれっと座っているだけに見えるかもしれないんですけど、僕らはやっぱり演奏しながら、本当にお客さんの息遣いだとか一挙一動、あっ、誰かあめ玉をなめようとしてカサカサやっているとか、これ、集中しているのかなとか、色々、そういうことを感じ取りながら、やっぱり聞いているんですね。

特にクラシックなんてあんまりなじみがないと思うので、どうやって聞いたらいいかわからないみたいなことから、ちょっと敷居が高まっているのかなということもあると思うので、本当に今日のお三方の全てのプレゼンは、僕の業界の問題というか、未来にもすごく密接に結びついているということを感じました。ですから、是非一緒にいいものを目

指していきたいと思います。ありがとうございます。

【小池知事】 ありがとうございます。クラシックのコンサートに行くと、私、前に風邪引いているときで、もう本当に苦しくて冷や汗が出ました、せき込んだりして。

【菊地裕介様】 いや、僕らもお客として聞きに行くと同じです。それはもちろん、ちょっと我慢しなきゃいけないことはたくさんあって、つらい部分もあるんですけどね。ただ、それを最後まで聞き届けたときのあの恍惚感というか、曲が最後までいったときの、そんなことをね。

【小池知事】 ありがとうございます。

パッケン、お願いします。

【パッケン (パトリック・ハーラン) 様】 今回、本当にクオリティーが高くて、次回、プレゼンテーションさせていただく者として、もう怖くて怖くてしようがない。次回までに、皆さん、記憶を消しておいてください。でも、ライブ音楽もライブスポーツも大好きな、あと、渋谷大好きな人間として、3つのプレゼンテーション、興味深く見せていただきました。是非力を入れていただきたいところなんですけど、3つの共通点としては、ある程度トップダウンの意識が高いような気がしますね。箱をつくりましょう、制度をつくりましょう、応援ビデオシステムみたいなものを広めましょうみたいな、そういうイメージはすごく強くてすばらしい、応援したいと思うんですけど、ちょっと考え方を変えて、草の根的な運動も起こせるといいなと思うんですね。東京ビジョン懇談会ですからトップダウンになりがちかもしれないんですけど、ここで最年長さんとして発言させていただきますと、LINEグループをつくった伊勢谷さんなんですけど、僕、加わったら、「長老、頑張り」みたいなことを言われて……。

【伊勢谷友介様】 僕じゃないですよ。

【パッケン (パトリック・ハーラン) 様】 そう。長老呼ばわりされたんですけど、一応、長老として言いますと、僕、日本に来て、東京に来たのは平成5年。もう24年前ですか。その時の東京に比べたら、正直、今の方がちょっと閉塞感があるんですよ。自由度が低いです。多分、区長もご存じだと思うんです。きっと、小池さんもご存じだと思うんですけど、昔、代々木公園に行くと、日曜日はもうロカビリティー、訳分かんないおっさんたちが踊ってました。

【高橋みなみ様】 えーっ！ 踊っているんですか。

【長谷部健様】 踊ってましたね。

【伊勢谷友介様】 ツイストで。竹の子族。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 踊ってましたよ。はい。音楽を聞いて、ツイストを踊ってました。あと、原宿だと歩行者天国、新宿でも渋谷でもやっけていまして、みんな、パフォーマンスやりたい方はそこでやって、パッケンマッケンも実はそこからスタートしたんですよ。人を集める行為は禁じられていましたけど、大して集まなくて大丈夫でした。そういう過去もあって、あの自由な空間が、今、すごい大事だったなと思うんですよ。スポーツだったら、今、スポーツ庁をつくって、オリンピックを応援しようとしているんですけど、それよりも先に、ボール遊びができる公園とかつくった方が早くないですか。日々のスポーツとの触れ合いがあった方が応援の仕方も自然に身につくと思うし、キャッチボールをやった後、野球を見に行くと、もっと盛り上がりますよ。日常生活レベルでパフォーマンスもスポーツもできるように、規制緩和とか、あと、大事なのは、迷惑に関する免疫と言うんですか。「迷惑はお互いさまだ」という昔の昭和の思いが、いつの間にか平成になって、迷惑は絶対掛けちゃいけないことになっていまして、ちょっとうるさいから保育園をつくれなとかボール遊びができないとか、ドームの近辺に住んでいる人は夜9時までにはコンサートを終えなさいって。ドームの近くに住んでいるすばらしい、恵まれた環境なのに、その特徴の一つ、ドームのコンサートを止めちゃおうという、この動きにはやっぱり非常に違和感を覚えますよね。

せっかくですからドームにも足を運んで、一緒に夜11時、12時まで盛り上がっていただきたい。箱をつくってもいいんですけど、せっかく箱があるなら、1日に3公演、4公演やりたい。でも、夜9時までという規制があると、なかなかできない。何で、あんな集客率が上がっているのに、どんどん箱が閉鎖されているのかと言うと、分かんないんですけど、途中で風営法で、クラブとかが取り締まりの対象になって、若者が踊れる場所もなくなったんですよ。僕は、遊び盛りだった25歳の時に東京に出てきて、遊んでいて、あの自由な六本木も新宿も渋谷も、今、ほとんど見当たらないです。箱をつくっていいんです、制度改定はいいんですけど、少し自由な東京を取り戻すのも未来のためにもなるかなと感じました。

【小池知事】 どうぞ。

【長谷部健様】 今、それ、一生懸命取り組んでいて、公園の復活とか、やっぱり大事だと思うんですよ。やっぱり言ったとおり、俺も子供の頃は、ロカビリー族と竹の子族というのがいて、中学校の頃はDCブランドブームというのが来て、中学校から高校になっ

たときはアメカジ、渋カジとか、音楽は「いかすバンド天国」ブーム。その後、大学になると、ギャル、コギャルが出てきて、渋谷系という音楽が出てきて、これ、全部ストリートから出てきているものなんですよ。これはやっぱり、おっしゃるとおり、ストリートで色々な、多様な人たちがまじり合って、まさにダイバーシティ。そこでまじり合うことで生まれてきた価値、文化だと思うんですよ。行政が文化をつくろうというので発信すると、大体すべて寒いものになる。だけど、ちょっと上目線かもしれないけど、その箱を用意するとか、そういった規制を緩和するとかということは本当に重要だと思っていて、ただ、やっぱり今、なかなか、1回禁止したものをほどくって難しく、だから、この点は、それに近いことと言えば、ハロウィーンのとときに渋谷をちょっと開放したり、カウントダウンをこの間、初めてやったり。国の政策で、今、プレミアムフライデーって始まったじゃない。だったら、金曜日の午後は表参道は全部歩けるようにしようとか、ちょっとずつ、今、そういうことは仕込んでやっているんです。

なので、是非これは草の根のムーブメントで、もっと声を上げてほしいし、あと、さっき言った、大きい新しい建物はどんどんできるけど、原宿駅みたいな、ああいう所を僕は守りたいし、そういうめり張りをつけて、やっぱり草の根からみんなが意見を言うようになれば、本当に、未来は明るいんじゃないかなと思います。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 そうなんです。時間限定でも場所限定でもいいから、自由に迷惑を掛け合うゾーンとかつくっていいかもしれないです。「東京迷惑ゾーン」というネーミングはどうかと思うんですけど、「東京自由度高いゾーン」みたいのがあってもいいかもしれない。

【長谷部健様】 だけど、環境の面から言ったら、駅周辺とかはもう歩くだけにして、本当にあの道路をみんなが普通に使えるようになればいいわけじゃん、環境の面から言っても。だから、違う切り口で色々攻めていく必要があるのかなというのは、ちょっと個人的には感じて、それでやっています。

【くわばたりえ様】 いいですか。

【小池知事】 時間があつと言う間になっちゃうので、じゃ、田口さん、くわばたさん、田根さん。

【田口亜希様】 高橋さん、太田さん、長谷部さん、ありがとうございます。まず、太田さんがおっしゃるとおりに、やっぱり応援ってすごい選手の力になるんです。どうしても日本では障害者がスポーツしていると、あつ、障害を持った子が頑張ってるって

るので見てあげないと、というイメージがあると思うんですけど、そうではなくて、実際スポーツをやっている人たちは自分が楽しくて、あと1位を目指したくて、より高い点を目指してやっているというのを分かっていたいただきたいんですね。

特に小池さんとかはブラジル、リオにも来てくださって、色々な試合を見てくださったんですけども、本当にブラジルの応援はすごかったんですね。もう、反対に見てないんじゃないかと、自分たちが楽しんでいるんじゃないかというぐらい、試合中もワッと盛り上がっていますし、ハーフタイムの時もずっと踊っていらっしゃるんですね。特に多分、視覚障害者の人にとっては、歓声というのはすごく力になると思うんですね。見るができないので、耳に入ってくるということで。

実際に日本に帰ってきてパラリンピアンたちに聞いたら、やっぱりリオの、ブラジルの人たちの応援はすごく力になったということで、金メダルは取れなかったんですけども、やはり北京とかロンドンを超えるメダル数が取れたというのは、応援の力はあったと思います。

一方、ブラインドサッカーとかゴールボールという、ボールの中に鈴を入れて蹴るやつ。音を聞き分けて、視覚障害者の方がボールを追っかけるスポーツですね。そのときもブラジルでは応援されていたので、音が聞こえないというクレームもあったぐらい。でも、それぐらい応援は盛り上がっていたんです。ですので、やっぱりこういう応援は選手にとってもすごく大切だし、会場が盛り上がるということで、応援の力は私たちも常々感じていますので、是非応援を盛り上げるものが大切かなと思います。それには、太田さんが書かれていたような、分かるものは必要になってくるかなと思います。応援するために、ルールとか外国人の選手とか、日本人の選手も名前とかが分からないですので、そういうのをICTとかを利用して分かっていくのは大切かなと思います。

特にパラリンピアンの場合は、オリンピックと違うところは、クラス分けというのがあります。何でかと言うと、障害があるので、みんな一律には戦えないので、それぞれ障害のクラス、分別、区別と言うんですかね、そういうふうに分けて戦う。それが、ふだん見てない人には、見ても分からないんですね。私も水泳とか見に行くんですけど、みんな、何が違うんだろうとか。でも、1位が何人かいるとか。そこは実はクラスが何個か一緒になって戦っているんで、レーンの1回の試合に3人ぐらい1位がいたりするんですけど、それが例えばICTを使って分かれば、見ていて楽しいと思っていただけると思うので、是非こういうのをどんどん実現していけたらなという夢が。わくわくしてきました。

あと、高橋さんがおっしゃっていたのでびっくりしたんですけど、私はそういうコンサート会場と違って、もう足りているものだと思っていたんですね。ちょっとうれしかったというか、思ったのが、私たちも色々競技会場をつくってほしいとか言うんですけども、そう言っている中にも、どっか、「でも、使われない中で、それは私たちのわがままなんじゃないか、これで赤字になってしまったら元も子もないな」といつも思っているんですけど、例えば、そういうコンサート会場、武道館とかがそうですね。代々木とかもそうですね。そういうのと試合会場と言うんですかね、競技場を融合して、無駄のない、そういうのをつくって行って経営していけたらなと思っています。それを是非渋谷区につくっていただきたいなと思っています。

自分のことなんですけど、50メートルの先の標的を撃つ射撃をやっているんですけども、私はその射撃場が千葉県の上野と神奈川県伊勢原にしかなくて、そこに片道100キロ、1時間かけて行くんですね。藤枝に射撃場があって、それは合宿で行くんですけど、50メートルの射撃場。そういう50メートルの射撃を撃つ人、あと、多目的と言って、サッカーとか、要するに、使う日と使わない日と言うんですかね、スポーツで使う日、射撃で使う日と別のスポーツで使う日を分けていまして。そうすると、藤枝の人たちも射撃場ばかりという思いではなくて、みんなで使えるというのを感じていらっしゃるの、是非渋谷区に射撃場をつくっていただきたいなと思います。自由な発想とおっしゃっていたので。

あとは、そういう会場が、やっぱりバリアフリーになる。先ほど、長谷部さんがおっしゃっていたとおり、バリアフリーというのはすごく大切で、コンサートに行くのに、今って私たち、車椅子の席というのは結構通路で見えるんですよ。そうすると、見にくいからやっぱりいいか、テレビで見ていたらいいかとか思っちゃうんですけども、是非そういうのもどンドン考えていって、障害者とかみんなが楽しめるような会場づくりをしていただければなと思います。

以上です。

**【小池知事】** ありがとうございます。りえさん。

**【くわばたりえ様】** お三方、お疲れさまでした。皆さんがプレゼンされたことは、色々な方がお話ししていたので、私が言おうと思ったことよりも、パクンがさっき言っていた、ドームが近隣の苦情があって9時までとか、保育園を建てる時に苦情が来て建てられないとか、色々なのがあって、私もその保育園の問題とかで、何でそんなの建てられへんねんとずっと思っていたんですけど、あるお宅でロケしたときに、隣に公園があるんで

すけど、もうすごいうるさいんですよ。全部窓閉めているのに。マイクに音が入ってロケができないんです、うるさ過ぎて。「こんなうるさいんですか」と言ったら、本当にうるさくて、どうしようもないんですって。私、その時初めて、保育園反対と言う人の気持ちも分かったなと思って。

だから、私、今まで、反対する人に対して腹が立っていたけど、こんなうるさいんやったら反対するのも分かるなと思って。反対するときに、もう何か、刑務所みたいな塀を立てろと言うんですよ、うるさくないように。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 防音壁。

【くわばたりえ様】 じゃ、私、逆に、私らのマンションで、高速道路の近くなので二重ドアなんですね。二重ドアって、閉めたらめっちゃ静かなんですよ。じゃあ、何かそういう施設の周りには、お金出して二重扉にしてあげますとか、そっちでお金を出してあげたりとか。苦情って一言で言ったら、苦情を出しているとなるけど、やっぱり苦情を言う人の気持ちにもなっていないと、ドームが9時まで、周りがどうってなるけど、周りの人だって、ごみ、一杯落とされるやろうし、みんな、軍団で、ライブ終わった後、テンションがガンガン上がりながら、ワーッと歩かれても困るやろうして、お互いがお互いのことを考えながらやっていかないと駄目なんじゃないかなと思いました。

【小池知事】 考えさせられますね。

田根さん。

【田根剛様】 都市のことは専門家でもあるので、ちょっとだけ。今日、拝見していて、非常に大事なことが一杯入っていたので。同時に、自分も東京の生まれなんですけれども、そこからスウェーデンやデンマークやイギリスとパリと4か国を住んでいる。そうすると、やっぱりヨーロッパのまちは非常に歴史を重んじて、過去の先人のつくってきたものの中で暮らしていくというのをすごく大事にしている中、東京に今、最近帰ってきて見ていると、何か違うなど。そこがまた東京らしさでもあり、世界にこんなまちはないことをポジティブに考えていこうという気持ちで見ている中で、日本の都市計画というものが、大きく言うと、都市の開発か都市の整備しか行ってこなかったと。計画というものはなかったんじゃないかということを感じていたんですね。

その中で、今、長くなるので省くんですけども、震災が起こって、東北に何度も通っていた中で、1つ、ここがこれからできたらいいなと思うのは、「地域環境計画」、地域と環境というもので、あまり都市として線引きをしたりとかするよりも、先ほどの渋谷区だ

ったりとか、そういった区域や地区というものを限定して、その環境をどうやって考えていくかと言うと、大分まちというのが変わってくることができるんじゃないかという意味では、今日のお話も、じゃ、この地区は劇場化しましょう、この地区は子供に優しい地区にしましょうとか、そうやって地域と環境が密接になっていくと、もっとまちが住みやすい地域を選ぶ権利と自由が生まれて、そこで、先ほどおっしゃった責任と自由というのはもっとまちの中で両立できるんじゃないかなというのが、これから日本のまちでつくれたらいいなということを考え、今日はすごく面白い提案が一杯あって、良かったなという感じでした。

【小池知事】       ありがとうございます。

じゃ、高校生内閣、あれ、また政権交代？

【千島洗太様】       今回は、副官房長官の僕、千島が参加させていただいております。さっきのお三方のプレゼン、ありがとうございます。プレゼンの感想も踏まえて、僕なりの意見をちょっと言おうかなと思います。

まず、スポーツからいきたいと思います。スポーツってやっぱり自分自身のスキル向上という観点からもとても大事であるし、しかも、スポーツというのは精神的なストレスというのも発散させる一つの手段となっている。だから、そういう健康社会というのを目指すに当たって、スポーツは切っても切り離せない存在なのかなと思います。

先ほど、太田さんも、頑張っている人を素直に応援できる社会をつくっていかうとおっしゃっていましたが、それを実際、僕は労働という分野でちょっと照らし合わせてみました。やっぱり労働においても、頑張っている人を素直に応援できる、要するに、働きやすい環境をつくっていくべきだということにもつながり得るわけです。やっぱりそういうことに当たり、直接的に労働の働き方改革を行おうといっても直接的には難しいかもしれないけれども、実際に、例えば、スポーツというのが今回挙がりましたけれども、スポーツという身近なものから段階を踏んで、スポーツで学んだ、例えば、頑張っている人を素直に応援できる、そういう気持ちを今度はどんどん派生させて、あらゆる場所でも使っていけるような、プロセスと言いますか、そういうものが大事なんじゃないかなと思います。

続きまして、まちづくりとエンターテインメント、一緒に感想を踏まえて話したいと思います。やっぱりプレゼンを聞いて、VRの可能性が大きく広がったというのが第一印象です。やっぱりVRというのが広がったのは、一人一人スマートフォンを所持する割合も高まったおかげによって、こういうことが実際に行えるという計画まで来ているのでは

ないかと思えます。コワーキングスペースも活用していくとおっしゃっていましたがけれども、実際に僕もよく利用しております。やっぱり新しいものを企画するとか、新しい動きを発足させるに当たっては、コワーキングスペースはなかなか使い勝手が良くて、結構重宝しているものであるので、今後も東京各地にどんどん増えていけばなと思っております。

あと、エリアマネーというのもありましたけど、まちづくりって、理想を言ってしまえば、住民がより良いまちをつくるにはどういう手段で、どういう方法で良くしていけばいいのかという、それを考えて、実行するという、その過程が必要なんじゃないかなとは思いますが、やっぱり現実的に考えると、通勤族も結構増えていて、素直に純粋に、このまちに対して思いやりがあるというのも言い切れない場面もあるんじゃないかな。そういうところに関して、エリアマネーという、結構単純にスマートフォンがあればできるという手段を使ってやれば地域貢献も手軽にできるので、そういうところに関して効率的ないいものではないのかなと思えます。エンターテインメントに関して、渋谷区長も色々提言されていましたが、それをうまく合体させて、いいものができればいいんじゃないかなと思えます。

以上です。

【小池知事】 実花さん。

【蜷川実花様】 すごく楽しく全部聞きました。まず、子供の頃、竹の子族になりたくて、将来、大きくなったら竹の子族がもういなくなっちゃっていて、その後、アメカジ、ブイブイしてセンター街を歩いて、90年代、渋谷系でデビューした私としては、渋谷、本当にすごく大好きで、日本の一番大事なことを発信できるカルチャーの中心になれるんじゃないかなと思っているんで、長谷部さんが色々やってくださっていて、すごく安心しているんですけども。やっぱり何かをつくることも大事だけど、緩和するって本当に大事だと思っていて。というのは、私が今引っかかかってきたのって全部ストリートから上がってきているものなので、ある種の自由をまちに仕掛けていくということは、やっぱり渋谷区だからできることじゃないかなと思っていて、そこら辺もすごく期待しているし、また、きっとそこから面白いものが出てくるんじゃないかなと思えます。

太田さんの応援の仕方というのは、本当にそうだなと思っていて。最近、良かれと思っていて、ちょっとずれていることが、特にパラスポーツの見方とかでも、つい気を遣い過ぎちゃってとか、日本人のいいところがうまく出ない瞬間ってあると思うんですけど、これ、本当に教えてあげたらいいと思っていて。小学校とかで子供たちに教えると、もう喜

んでやるのが目に浮かぶんですけど、やっぱり子供が「こういうふうに応援するんだよ」と家に帰って言うと、大人はすごく聞くので、ああ、なるほど、そうなんだと言って、子供から攻めるのは1個ありかなと思うし、ものすごく楽しく素直に、もうギャーギャーやっているのが目に浮かんだので、是非、それ、何か実現できたらなと思います。

やっぱり劇場、足りないですよ。

【高橋みなみ様】 足りないです。

【蛭川実花様】 それも本当に、何かできたらいいなと思うのと、あと、やっぱりギャラリーとか美術館とか文化的なことを発表できる場というののもっとも少なく、大きな箱も少ないんですけど、若者が何かを発表しようと思ったときに、ちょうどいいサイズのちっちゃいギャラリーというのが本当にないんですよ。それは、東京都全体、でっかいのはあるけど、でも、それも東京は足りないですよ。東京自体、そんなに、例えば、私がやろうとしたら、2年、3年先までどこも埋まっているし、今まさに2020年、どこでやるかって大もめしているんですけど、そういうこともあるし。でも、ちっちゃい、これから出ていく人たちが、今、すごく出づらいですよ。ネット上ではできるけど、じゃ、実際に見える、実在している場所というのがすごく若者が出ていきづらいので、それはやっぱり渋谷区にあったらいいな。それは自分が若い時、出ていくときに、パルコギャラリーが憧れだったりとか、どこがあった、何があったとかということがやっぱり減ってきちゃっているんで、そこは是非サポートしてもらえたらなと思います。

すみません、ありがとうございました。

【小池知事】 アブディンさん。

【モハメド・オマル・アブディン様】 一言だけです。全部がすごい楽しかったんですけども、長谷部区長、すごくすばらしい夢のある話をしてくれたので、私は個人的に、一人でぶらぶらスクランブル交差点を渡りながら渋谷を歩く日をすごく夢見ているんですけど、その今、最大の障害は、渋谷の駅を出たスクランブル交差点の周りに、今、宣伝で大きな画面がありますね。そこから、どんどん色々な音があふれていて、もう制空権が奪われている状態で、空が奪われている感じで集中できないんですよ。1人で歩くのはなかなか難しいので、見える人にとってはすごくすばらしいものかもしれないけど、色々な人にとって住みやすい、歩きやすい、魅力のあるまちを、色々な意見を反映していただければありがたいなと思います。よろしくお願いします。

あと、応援の方は、私は時々、神宮球場のネット裏でやじを飛ばしているときがあるん

ですけれども、申し訳ないです。肝に銘じて、ちゃんと。

【太田雄貴様】 やじは最高です。

【モハメド・オマル・アブディン様】 そうです。カープファンでね、ちょっと。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 カープファン？

【モハメド・オマル・アブディン様】 はい、そうです。にわかカープファンじゃなくて、暗黒時代からのカープファンなんで。だから、ダブルプレーになるよりは、バッターは振らなくていいですよとか、そういう心ないことを言ったりとかするんですけれども、是非応援が日本でも良くなればいいなと思っています。

【小池知事】 ありがとうございます。みんな忘れているかもしれないけど、アブディンさん、スーダンから来た人ですからね。思い出してください。

ごめんなさい、じゃ、1分ずつぐらいにしてくださる？ あと時間がもう来ちゃいそうなので。山から出てきた青木さん。

【青木亮輔様】 ありがとうございます。そうですね、僕も聞いていまして、例えば、まちに出てくるのは、実はすごく大変なんですね。やっぱり山に住んでいるということもあって。例えば、応援をすごくしに行きたいスポーツあるんですけど、今のところ機会が少ないかなと思っていて、応援の仕方というところもちろんそうなんですけど、何か東京の中でももうちょっと近くで、例えば多摩エリアにももう少し色々、そういうスポーツが観戦できるような所があったりとか、市民球場みたいな所でもいいと思うんですよ。そういった所でそういったものが、色々な競技ができるとすごくいいななんていうのを漠然と考えていました。

あと、5G、そういった話も、多摩のエリアだとすごく恩恵を受けられるなと考えていて、多摩にいながらにして、まちにいることと同じような状況が得られるのはすごくうれしいなと思いました。もっとまちに来ればいいんですけど、赤ちょうちん的な所 ぐらいしか来る機会がなくて、これからまた色々楽しみになるなと思って聞いていました。ありがとうございます。

【小池知事】 ありがとうございます。檜原村から、ご苦労さま。行くと、フィトンチッド、もう満喫できますから、是非間伐に協力してください。

【青木亮輔様】 そうですね。ごめんなさい。あと、建物も是非木を使ってもらえたらうれしいです。

【小池知事】 ああ、そうですね。気（木）を使います。ありがとうございます。

松澤さん、お願いします。

【松澤香様】 お三方のプレゼン、大変楽しく聞かせていただきました。ありがとうございました。法律面で色々支障があるということなので、ご相談いただければ頑張りますので、よろしくお願いします。

太田さんの応援できる社会へ、というのは、まさにいじめについても、解決する一つの手段かなというふうにお聞きしまして、ゴールポストから外れたときに、「あー」じゃなくて「ドンマイ」ってチームとして言うってというのは、傍観者から当事者への転換、だと思っんですね。なので、相手の立場に立って考える、行動することの基本だなということで、非常に大きな可能性を感じました。

以上です。

【小池知事】 ありがとうございます。

メイミさん、一言いただけますか。

【メイミ様】 お三方のプレゼン、とても楽しく拝聴させていただきました。私からは1つだけ提案なんですけれども、小さな劇場、箱が少ないというので、その裏には経営難があったりというような話も伺ったりします。これは下北沢の例なんですけど、小劇場が多いまちで、まち全体でフェスをやるというような取組を毎年、今年で6回目で、今週末にあるんですね。音楽フェスなんですけれども。そういった形で、このまちでは、まち全体で音楽のフェスをとるか、このまちではアートの祭りをとるように、都市ごとの特化したまち全体のイベントをやったら面白いかなということを思いました。

以上です。

【小池知事】 ありがとうございます。

ティナさんは初めてで、びっくりしたかもしれないけれども、いかがでした？ 途中からの感想でも結構です。

【山科ティナ様】 今日は途中からで、渋谷区長のプレゼンのみでしたが、ARを使ったまちの楽しみ方がすごくわくわくするなと思っまして、自分も今、デジタルネイティブ世代で、まちに出たとしても、ずっとスマホを見てしまうなど、まちに出てもまちを楽しめてないなと思うときがあっって、でも、ARを使った企画で、本当にネットを見るよりもまちを見た方が情報量が多いんじゃないかなと思っしました。

【小池知事】 ありがとうございます。

最後は、漁業者の立場からどうですか、西田さん。

【西田圭志様】 ライブとかスポーツ観戦に関しては、青木さんと同様になかなか見に行く機会がないので、島でもやってほしいなと思うだけなんですけど、漁業者としてじゃなくて、島の住人としては、長谷部さんの発表の中にあっただ、色々な技術が島の観光地とかで結構使えそうだなと思って。例えば、自然の観光地、国立公園とかだと、ここはこういうふうにできましたみたいな看板を立てるのも景観を損ねてしまったりすると思うんですけど、そういうのをARでできたりとか、三宅島は火山でできた島なんですけど、こういうのはこんな感じで火山でできましたみたいなのが、そろそろ再現されたりしたら面白いなと思いました。

【小池知事】 ありがとうございます。

【落合陽一様】 すみません。一瞬だけ、議事録に残したいので、言いたいことがあって。

【小池知事】 どうぞ。

【落合陽一様】 箱物なんですけど、箱物の問題は大体解決できると最近思ってきて、僕、今、展覧会、ヤフーのオフィスでやっているんですよ。ヤフーのオフィスは展覧会スペースじゃないんですよ。そこで人が普通に働いているんですよ。なんだけど、例えば、フランスもそうなんですけど、空いている物件とかをギャラリーにしてしまうのは、音が出なければいいですね。ライブとスポーツは音が出るから、それは結構難しいんですけど、それ以外の展示場所に関しては多分意外と融通が利く。それって、箱物を建てるよりクールなんです。箱物を建てるってマジでダサいんですけど、あるものを使って転換するのはめっちゃクールなんで、それができるような所からやっていくのがいいかなと思っています。

【蜷川実花様】 そのマッチングのシステムとかがあるといいね。

【落合陽一様】 そうそう、そこだけITでつくるというのがめっちゃ熱いんです。

【蜷川実花様】 そこがやっぱり、どこでやっているのか分かんないから、それが何か。

【落合陽一様】 そう。組み合わせると超熱いですよ、それ。

【蜷川実花様】 それが一番いいね。

【小池知事】 今、東京都内だけで空き室、空き家、82万戸。

【落合陽一様】 82万組、アーティストができれば熱いですよ。

【小池知事】 マッチングはやっていくと、介護施設とか保育施設、もしくは保育士さんとか介護士さんのお給料で払うというのではなくて、ちゃんと住宅をカバーしてあげる

という、それだけで。だから、ちょっとしたことなんだけれども、大きなことなんですね。

今日はありがとうございます。もう時間が、皆さんの時間をオーバーしているような状況ですけども、今日はたかみなさん、太田さん、長谷部さんのプレゼンテーション、ありがとうございます。

とても身近なところで、みんな、もっとわくわくしたい、わくわくできる、みんなで盛り上がる東京にしてほしいという思いは良く伝わりましたし、私もそうしたいと思います。そして、例えば、落合さんは4,000人収容のアリーナをつくるの？

【落合陽一様】　うち、4,000から7,000ですね。

【小池知事】　4,000から7,000。

【伊勢谷友介様】　前、つくば市、もっとでっかいのありましたよね。

【落合陽一様】　ホールみたいなやつはあったりするんですけど。

【小池知事】　大学のをつくるんでしょ。

【伊勢谷友介様】　それは止められたんでしょ、市民からの。

【落合陽一様】　はい。市民の反対があつて。僕らは大学の国有地の所を使ってつくろうと。その損益分岐点が7,000人ぐらいなんですよ。そこじゃないと、そもそも利益が上がらないので結構大変。

【小池知事】　例のオリンピックの会場選びということも、要は、建設時のお金と、あと、例えば、10年、20年後に改修などをすると、大体、最初と同じぐらいのお金がかかるんですよ。だから、そういうエコサイクルを考えないと、最初のお金だけでワーワー言うけれど、結局、その後、その倍かかることを念頭に置かなければ正しい方法ではないし、リオの色々な会場が今、ぺんぺん草が生えちゃったりしているということを絶対東京ではやりたくない。色々そういうことで工夫していきたいと思います。

それから、そうだよ、竹の子族ってあったよね。

【蜷川実花様】　なりたかったんです。

【小池知事】　なりたかった？　考えてみたら、今、そこを自分で、もしくは2人、3人でワッと踊っているところ、YouTubeにアップしたら、もう竹の子族の世界版ができちゃうみたいなのがあつて、だから、だんだんストリートから追い出されたのか、もしくはYouTubeの方が先にもっと発達したのか、両方だと思いますけれども、是非やはり人いきれのするとか、みんなでワイワイガヤガヤのまちづくりというのは常に、これからも

渋谷、そして東京全体で進めていかなければならないと改めて思った次第です。

それから、公園は、これまで何々してはいけない、これはしてはいけない、Don't、Don't、Don'tばかりだったんだけど、もっとこれからは、Don'tからDoに変えるということで、公園法も改正をされて、都立公園の中に保育施設をつくるといったようなことも、特区から、今度は国全体の法律に変えようというぐらいの勢いになっているので、何々してはいけないというDon'tから、これからはDoで何ができるかというふうに変えていくということですね。

会場が足りないということで、よく私、聞かれるのが、コミケ（コミックマーケット）、2020年、大丈夫かと聞かれるんですけど、工夫して、何とか開催し続けられるようにしたいなど。あなたもファン？ コミケ？

**【高橋みなみ様】** コミケ、いいですね。まだ行ったことはないんですけど。

**【小池知事】** ということなどなど、今日は皆さんの率直なご意見を聞かせていただきました。私も最近の日本って、ちょっとこじんまりし過ぎと思っている。もっと爆発するような、伸び伸びとできるような形に、型にはまらない、恐れない、そんなことが日本にとっても必要だと思いますし、東京、これからもやりたいことができる、自分がやりたいことができ、自分が輝いて、みんなと輝けるというようなダイバーシティというのを、私、目標にしているんですけども、是非それを感じていただけるようにしていきたいと思っております。

今日はお三方で、次は誰かな。アブディンさん、パッケン、田口さんね。また楽しみにしております。2050年、皆さんに託しますので、素晴らしい東京づくりにこれからもアドバイス、よろしくをお願いします。アドバイスというかな、意見、がんがん下さい。今日はどうもありがとうございました。

**【潮田次長】** 皆様、大変ありがとうございました。以上をもちまして、第3回東京未来ビジョン懇談会を終了いたします。

次回は8月の上旬に開催いたします。また、よろしくどうぞお願いいたします。

— 了 —